

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

最終改訂年月 : 17 January 2002

背景: エビデンスから、学習と記憶でのNMDA受容体の役割が支持されている。抗生物質のD-シクロセリンには、興奮性伝達物質であるグルタミン酸塩の作用促進を介したNMDA受容体の調整能がある。アルツハイマー病を擬似させるためにスコポラミンを前投与した健常被験者を対象とした試験から、D-シクロセリンは低用量にて望ましい効果を発揮することが示されている。

目的: アルツハイマー病患者におけるD-シクロセリンの安全性と有効性について評価すること。

検索戦略: cycloserine、D-cycloserineの検索語を用い、2004年1月2日にSpecialized Register of the Cochrane Dementia and Cognitive Improvement Groupを検索することによって試験を抽出した。本登録には、全ての主要な医学データベースから得られた記録が含まれており、定期的に更新される。

選択基準: D-シクロセリンと対照治療が比較された、交絡なしのランダム化二重盲検試験。

データ収集分析: 2件の大規模ランダム化対照試験と2件の小規模ランダム化対照試験を抽出した。いずれの試験でも全般臨床改善度が用いられ、主要アウトカムとされていた。

主な結果: 2件のクロスオーバー試験では初期段階の結果が抽出できなかったため、メタアナリシスは2件の6ヶ月間並行群間試験に基づいて実施した。全般臨床改善度から評価したところ、いずれの投与量でも6ヶ月目に改善が示された被験者数から見て、D-シクロセリンに望ましい効果があるとは示唆されなかった。6ヶ月目の投与終了に先立つ何らかの事由による中止数は、プラセボ(中止数が少ない)の方がD-シクロセリンの30mg/日用量(OR 2.94、95%CI 1.52、5.70)および100mg/日用量(OR 3.23、95%CI 1.67、6.25)と比較して有意に望ましい傾向であった。6ヶ月目までの有害事象に起因する中止には、治療群(2、10、30、100、または200mg/日)とプラセボ群との有意差が認められなかった。

レビューア見解: 臨床的意義が十分検出可能な統計力を有する対照臨床試験では、認知のアウトカムに対するD-シクロセリンの望ましい効果が認められていないことから、D-シクロセリンはアルツハイマー病患者の治療としては用いることができないと言える。

Citation: Jones R, Laake K, Oeksengaard AR. D-cycloserine for Alzheimer's disease. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2002, Issue 2. Art. No.: CD003153. DOI: 10.1002/14651858.CD003153.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Dementia and Cognitive Improvement

* ご注意: この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。